

# 戦場の便り

—『後三年合戦絵詞』の一場面をめぐって—

楊 暁 捷

## 1 戦場の風景

絵巻『後三年合戦絵詞』（1347年成立）は、平安後期の1083年から1087年にかけて陸奥の地に繰り広げられた源義家と清原家衡・武衡という2つの軍事集団の合戦を描く<sup>1)</sup>。現存3巻（東京国立博物館蔵、重要文化財）の中巻第5段は、城を囲む義家軍勢側の苦闘の様子を伝える。この段の詞書の前半は、つぎの通りである。

城をまきて、秋より冬にをよ  
びぬ。さむくつめたくなりて、  
みなごこえて、おのおのかな  
しみていふやう、「こそのごと  
くに、大雪ふらむ事、すでに今  
日明日の事なり。雪にあひな  
ばごこえしなむこと、うたが



図1 義家の軍陣の内  
（『後三年合戦絵詞』中巻第5段より）

ふべからず。妻子どもみな国府にあり。各いかでか京へのぼるべき」といひて、  
なくなくふみどもかきて、「われらは一定、雪におぼれてしなんとす。これをうりて  
糧料として、いかにもして京へ帰のぼるべし」といひて、わがきたるきせながをぬぎ、  
のり馬どもを国府へやる。（現代語訳：城をとり囲んだまま、時は秋から冬に入った。天気は寒く、冷たくなり、兵士たちはみんな凍えて、一様に悲しんだ。「去年のように大雪が降ること、今日か明日

だろう。雪が降ったら、凍えて死ぬに違いない。妻も子供も国府にいて、かれらはどうやって都へ戻ることができるのだろうか。」兵士たちは涙を流しながら、「わたしたちどもはきっと雪に埋まれて死ぬことだろう。これらの品物を売り払って、幾ばくかの食べ物に換えて都へ帰りなさい。」と手紙を認め、身にかけていた鎧を脱ぎ、乗り物の馬と共に国府へ送った。)(『後三年合戦絵詞』中巻第5段)

この状況を表して、第5段の絵の前半は、5人の武士のそれぞれの動作や仕草を描く。長櫃に鎧兜を畳んで入れて、普段着の姿になって深痛な顔で武具を見つめる武士を真ん中に配置して、これを囲むような形で3人の武士はそれぞれ手紙の作成に夢中し、あとの1人は作成し終えた手紙を大事そうに使用人に差し出している。

絵師が描こうとしたのは、明らかに古代戦場に見られる一つの風景だ。ただしこの構図は、あまりにもユニークで、生死の分かつ戦場ということからはおよそ想像のつかない展開を見せ、ひいては少なからずの戸惑いをもたらす。この絵は、いったいどのようなストーリーを伝えようとしたのだろうか。絵師と当時の読者が共通して持っていた知識とは、はたしてどのようなものであり、それが如何にしてこの段の絵の意味と読み方に影響していたのだろうか。

この絵の主役は、いうまでもなく手紙である。平安や鎌倉時代における手紙のありかた、その作成や享受の現場、それに手紙にまつわる生活の空間は、この絵の構図の拠りどころだろう。したがって、絵を読み解くための手がかりを求めて、ここに古代の手紙にまつわる一つのささやかな旅を試みる。

## 2 手紙の作法

絵に描かれた手紙作成に励む3人の武士のうち、2人は筆を手にとっている。しかも同じように二つ折に畳んだ紙を地面の置き、さらに各自に硯を構える。手紙を書くというプロセスは、いわば2つの角度から立体的に表現されている。武

士たちの神妙な姿勢から、どうやらなんらかの作法を守っているように見受けられる。

はたして手紙の作法というものは、平安の知識人たちが喜んで習得、伝授し、かれら自身の教養と身嗜みの表われだとされていた。その詳細は、数多くの作法書に記されている。一例として、手紙作法書の集大成と位置付けられるもので、守覚法親王（1150-1202）が記した『消息耳底秘抄』<sup>2)</sup>には、つぎの一条がある。

#### 人前物書様

先硯二水ヲ入。墨ヲモテ不摺之前二筆ヲ取。硯水二差浸ヲサキヲ見ル。次二紙ヲ卷テ前二置。或最前トモ云。次二墨ヲ以テ水ヲ三度硯ノ面ニ上テ和スル。次紙ヲ取筆ヲ染テ書也。（略）（『消息耳底秘抄』）

今日に読めば、煩雑と思われるぐらいの礼儀作法である。だが、紙を手前に置く、硯を用い、傍らに墨を添える、手紙を片手に取り出し、筆をおもむろに持ち挙げて、紙の上を走らせる、といった絵に見られた詳細なプロセスは、この作法書の記述と一々照合できることは興味深い。

一方では、3人の手紙作成の武士の真ん中の1人の仕草は、やや理解に苦しむ。かれは筆を手ではなく口に銜えている。代わりに左手に巻き上げられた手紙を握り、右手は小刀をかざす。かれはいったいどのようなプロセスに取り掛かっているのだろうか。

おなじく『消息耳底秘抄』は、つぎのような二つの作法を伝えている。

#### 消息礼

（略）又立紙ノウハ紙ヲ返事ニ名所ヲ切テ用ハ答ナキコト也。

#### 礼紙事

又礼紙ヲ封タル時。文書多クシテ不被封之時ニハ。紙ヲ逆ニ細ク切テ可封

也。秘事也。（『消息耳底秘抄』）

さらに、江戸の故実家伊勢貞丈（1715-1784）は、絵を添えてもう一つ別のプロセスを書き記した<sup>3)</sup>。

### 捻り文の上包の紙よりの事

捻り文の上下を紙よりにて結ぶ事、口伝有るよし『貞順の記』に見えたり。この口伝は、紙よりを一まわり廻してまむすびにするなり。結ぶ時、上の結びは、紙よりの端を我が右の方なるを左の方の端にかけて結ぶなり。小袖の上がえを上にするが如し。下の方の結びは、我が左の方の紙よりのはしを右の端にかけて結ぶなり。左まえにかくるなり。これ、上は陽、下は陰の心なり。まむすびにして紙よりの端を切るに、上の方のば二刀に切り、下の方のは引揃えて一刀に切るなり。二刀は我が前へ向けて切り、下の一刀はさきへ向けて切るなり。これ又陰陽の儀なり。上二刀・下一刀、以上三刀なり。（『貞丈雑記』巻9「書札の部」）

ここには「切る」というプロセスを用いる三つの異なる状況を確認できた。すなわちもらった手紙の「ウハ紙」から名前の書かれたところを切り取って返事の宛名に使うこと、手紙の分量が多くて包み切れないときには紙を切り裂いて対応すること、さらに手紙を結び締める紐を裁断すること、という三つのやり方である。三つの内容を読み比べれば、絵が意図したものは、2番目の状況といったところだろうか。家族に寄せる手紙は、つつい溢れんばかりの思いを綴って、普段の分量を超えてしまった。そのような心痛ましい状況を絵が工夫して表現しようとしたに違いない。

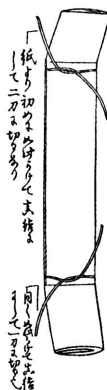


図2 「紙より初めに如此かけて真結にして二刀に切るなり／同く如此かけて真結にして一刀に切るなり」（伊勢貞丈『貞丈雑記』巻9「書札の部」より）



手紙作成の正しい手続きやあるべき心構えを記した故実書は、実際の生活のなかでどれぐらい守られていたかは別として、目前の絵の内容を理解するためには、格好の手引書となった。

### 3 絵巻に描かれた手紙

3人の武士が手紙作成するという構図の1番右側に、4人目の武士はすでに一足さきに自分の手紙を仕上げ、それを伺候する下人の男に手渡している。このやりとりは、したがって作者の手を離れた1通の手紙の旅立ちを伝え、これを目にする読者は、手紙がやがて迎える運命を思い、自然と想像を膨らんでいく。

小松茂美は、『手紙の歴史』<sup>4)</sup>において高島千春(1777-1859)が著した『古函類従』を紹介した。それには、絵巻の画面に見られる9例の手紙の画像例が模写して集められた。中にはいま課題にしている画面も対象となり、1番目の武士の前に置かれた完成された手紙と用紙が模写された。特定のテーマや内容の絵を絵巻の画面から抜き出し、物語表現という役割から一旦切り離して画像を見つめるというやりかたは、やがて絵巻観察の方法の一つとして現代の学者に受け入れられる<sup>5)</sup>。

上記の高島千春の方法を借りつつ、『絵巻物による日本常民生活絵引』などを参照すれば、絵巻に描かれたじつに多数の手紙の実例に出会うことが出来る。それらの画例を内容的に分類すれば、およそつぎのようなグループだと考えられよう。

#### (イ) 手紙を書く

『石山寺縁起』巻5第1段

『春日権現験記絵』巻1第4段

手紙を書くためには、きまって左手に便箋となる紙を握り、背をまっすぐ伸ばして慎重にこれに向かうというポーズを取る。ちなみに文机に向かってなにかを書いたり読んだりするような場面も多数あるが、それらはたいていお経な

どを書写したり読み耽ったりするものである。手紙作成は正しい姿勢を要求しながらも、お経よりは度合いが低い、とでも言えようか。

(ロ) 手紙を送る

『当麻曼荼羅縁起』上巻第2段

課題の絵と内容的に照合する画例である。作成された手紙を明らかに身分の低い人に手渡し、手紙はその時点から果たすべき使命に向かう。なお、この手渡す様子は絵巻において手紙自体のある種の緊迫性を暗示しているとも取れる。



図3 文の数々(高島千春『古図類従』文政6年刊より)

(ハ) 手紙を配達する

『伴大納言絵巻』中巻第2段

『慕婦絵詞』巻10第2段

『一遍聖絵』巻8第5段

『西行物語絵巻』万野家蔵本

道行く大勢の人々の中に、ストーリーの展開とは関係なく手紙を大事に掲げて先へと急ぎ、あるいは立ち止って偶然に出会う大事件に夢中になる男の姿がよく見かけられる。そのような群集の様子はいつもさまざまな職業や階層の男女の姿を意識的に集めて描き分けるという構図から考えれば、手紙を配達するという姿はまさに典型的な平安、鎌倉時代の街の風景の一つだった。

(二) 手紙を届ける

『絵師草紙』第2段

『北野天神縁起』巻1第2段

『伊勢新名所絵歌合』第1段

1通の手紙はようやく目的とする読み手の手元に届けられようとする。さきの手渡しという状況と対照的に、今度手紙は身分の低い人の手に握られ、その人が恭しくこれを身分の高い人に差し出す。手紙の読み手との近い距離や上下

関係を伝えようと、差し出す場所はふつう縁側である。

#### (木) 手紙を読む

『北野天神縁起』弘安本中巻第2段

『松崎天神縁起』巻2第4段

手紙を書くためには姿勢を正しくすると照応して、手紙を読むというのも厳粛で大事な行為である。読む人は正座し、手紙は両手の間に持ち上げられ、あるいは前の畳に上げられる。

#### (へ) 手紙を保存する

『慕帰絵詞』巻2第2段

『絵師草紙』第3段

読み終わった手紙は、貴重な財産として後日でも大事に保存される。もともと手紙は多くの場合において、単なる私的なものに終始するものではなく、個人間に交わされた手紙がそのまま公的な文書との効用を担った。

このようにそれぞれ異なる状況や局面に置かれる手紙のさまざまな実例を絵の中から拾いあげ、集めてみると、おのずと手紙の生涯が浮き彫りになるとの観が呈する。絵巻が伝えるそれぞれのストーリーにおいて手紙の役割は異なるだろうけど、それぞれの手紙は、多かれ少なかれ似たようなプロセスを経てそれぞれ自身の一生を辿ったと言えよう。

## 4 呼び名の数々

絵巻の読解は、画面に描かれたもののみを対象に限ってはならない。絵はあくまでも生活の状況を映し出すものであり、豊かな生活の様子やそれに対する人々の思いを知ってこそ、手紙を描いた絵の理解が得られる。そのため、絵から文字による文献資料への展開がつぎの課題となる。

その第一歩は、「手紙」という現代の語彙を見つめなおすことである。手紙とは江戸時代に入ってから使われ始めた言葉である。伊勢貞丈の考証によれば、「手づから書たる状」を意味する「手簡」という言葉が「しゅかん」、「てかん」

と読まれ、それが転じて「てがみ」となったとされる（『四季草』秋草下<sup>6)</sup>）。またこれと平行する説もあり、手紙という言葉の語彙成立の歴史はかならずしも明確ではない。

これに対して、中世までには手紙について、じつに豊富な呼び名が与えられていた。

一番多く用いられ、分かりやすい言葉は、『後三年合戦絵詞』の詞書にみる「ふみ」である。この言葉をめぐり、数多くの呼び名が敷衍される。礼紙と上紙を用いて二重に巻いて、上下を折りこむ「立文」は、詞書に登場しなかったが、絵に描かれた。それに特定な用途や意味合いを含んだものとして、「請け文（承諾書、答申書）」（『古今著聞集』575話、など）、「怠り文（詫び状、謝罪文）」（『今昔物語集』巻28第36話）が挙げられる。「ふみ」とほぼ同等の言葉としては、「消息」がある。漢文や変体漢文に留まらず、和文の日記文などにも多くの用例が認められる。さらに文学的な情調を持たせるものとしては「雁の使い」が挙げられ、和歌の歌語として多用され、絵巻では『絵師草紙』の詞書にも登場した。より広い意味では、うわさ、情報を意味する「便り」、手紙に返信する行為を指す「返事」なども、ときには1通の手紙を指示するものとして用いられていた。これらの語彙については、平安や中世の文字文献にいずれも膨大な用例を擁し、それらを一々提示することは、ここではさほど意味を持たないと思われる。

つぎに、これらの語彙を手掛かりにして、平安貴族の日常生活にある手紙の姿をいくつかの具体的状況や伝説を通して求めてみよう。

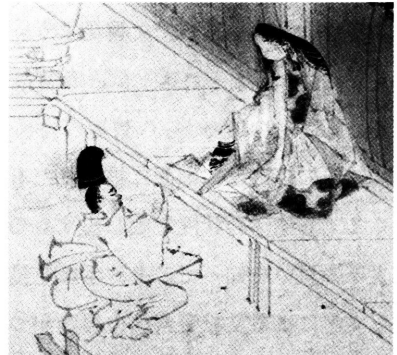


図4 手紙を受け取る（『伊勢新名所絵歌合』第1段より）

## 5 みちのくに紙

清少納言の『枕草子』には、手紙にまつわる逸話、思いが多数記されている。繊細で豊かな知性に富む平安女性にふさわしく、それらの記述はまさに秀逸で、その時代に生きる人々の生活の一端を覗かせてくれた。

手紙を用いての交友、詠歌、情報交換など、清少納言の生活から手紙というものを取り除いてしまうことはまさに考えられない。清少納言自身の言葉で言えば、「文といふ事なからましかば、いかにいぶせく、暮れふたがる心ちせまし。」(221段)<sup>7)</sup> すなわち、手紙という存在がなければ、気持ちがちよぼんとなって、四方塞がって居ても立ってもいられないといったところだ。その清少納言は、自分で手紙を書くだけでなく、人に書かれた、自分に送られたものではないものまで含めて、すべて鑑賞の対象とした。「うれしきもの」を数えあげて、清少納言はつぎの一項目を記した。「人の破り捨てたる文を見るに、同じつづきあまた見つけたる。」(254段) 他の人が破り捨てた手紙を継ぎ貼りして復元して読み、その上その続きまで読めたらと、まさに手紙というものへの貪欲なぐらいの思いだった。

一方では、清少納言は手紙や詠歌に用いる紙のことに並ならぬ思いを抱いた。例えば、つぎのような記述が読まれる。

心ゆくもの (略) 白く清げなるみちのくに紙に、いと細くかかへてはあらぬ筆して、文書きたる。(略) (31段)

うれしきもの (略) みちのくに紙、白き色紙、ただのも、白う清きは、得たるもうれし。(略) (254段)

清少納言にとって、心地よいもの、嬉しいものといえ、いまだ使用されていないまっさらの紙が手に入り、しかもそれに思うがままに手紙を書き入れるということが確実に上位の一つとして数えられる。そのような紙は、白くて、清潔で、上品なものだけに留まらない。清少納言は繰り返しそれが「みちのくに

紙」、すなわち「陸奥紙」でなければならないと強調した。檀の樹皮をもって作った紙で、陸奥の地から生産されたからその名が与えられたものだろう。

同じ思いを清少納言はつぎの段においてさらに言葉を尽くして説いた。

(略) 世の中の腹立たしうむつかしう、かた時あるべき心ちもせで、いづちもいづちも行き失せなばやと思ふに、ただの紙のいと白う清らなる、よき筆、白き色紙、みちのくに紙など得つれば、かくてもしばしありぬべかりけりとなむおぼえはべる。(略) (255段)

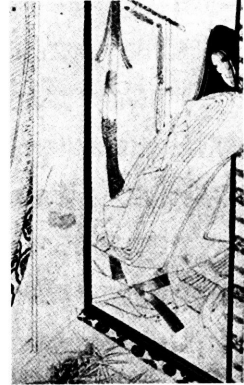


図5 登華殿にいる清少納言  
 (『枕草子絵詞』第3段より)

世の中のすべてのことに失望し、生きる気まで失ってしまってどこかへ消えてしまいたいような気分襲われたおりに、前述したような紙さえ手に入れば、心がいっぺんに慰められ、ふたたび生きる気力がえられるものだという。まさに紙の魔力といわざるをえない。

いうまでもなく「みちのくに紙」は、清少納言だけが言及する品物ではなかった。同じ時代の文献、とりわけ『源氏物語』を含む物語や『枕草子』をはじめとする日記には、多数の用例が見られ、高級紙の代名詞として宮廷生活の一角を担った。

一方では、後三年の合戦の戦場は、まさに陸奥の国にはかならない。絵巻の画面に、武士たちがそれぞれ大事に手に握り、地面に無造作に置いた紙とは、すなわち「みちのくに紙」に違いないと当時の読者が見ていたのだろう。王朝文化を熟知した読者には、この画面から、ただの手紙や便箋以上の感慨を感じたことを読み取りたい。

## 6 手紙逸話

ここに平安日記とは別の文献群、平安時代の説話集に目を転じてみる。同じ王朝貴族の生活はことなる角度から捉えられ、その中において、手紙にまつわるエピソードはまた違う姿を見せてくれる。

つぎは、比叡山の無動寺というところで起こったささやかな一幕である。

(略) 義清阿闍梨、極ク騒タル顔シテ恐テ、畏マリテ、「此レヲ何ガセムト為ル。侘シキ事カナ。然ラバ先ツ不宣ハヌ前ニ、怠リ文ヲ書テ進テム」ト云テ、忽ニ手箱ヲ開テ、吉キ紙四枚ヲ取出シテ、何カニ書ニカ有ラム、書ツ。其レヲ押卷テ懸紙シテ立文ニシテ、上書ニハ、「某ノ房ノ御房ニ大法師義清ガ上」ト書テ、苜萱ニ付遣ツ。(略)『今昔物語集』卷二十八第卅六話<sup>8)</sup>

この数行は、ある特別な状況のもとでの手紙作成の様子を伝えている。寺の中の実力者に媚びようとする義清という僧侶は、自分の失態を畏まり、謝りの気持ちを相手に伝えようと、驚くばかりのスピードで行動に移り、謝罪を手紙に認めた。そのかれが1通の手紙を書き上げるというプロセスはみごとなものだった。上質な紙を文箱から取り出し、文章を吟味する暇もなく思いついたものをそこに書き留め、あっという間に巻き上げて両端を捻り、さらに秋草のカルカヤまで貼り付けた。ストーリーを記した説話の洗練された書きぶりも加わり、じつに目を見張るものだった。

つぎにさらに一話、手紙のある風景が語られている。これは美濃のとある五位という低い官吏の身の上で起こった出来事である。

(略) 而ル間、主ノ美濃ノ守新ク家ヲ造ケル所ニテ、此ノ五位ヲ呼ケルバ、其ノ日、十八日ニシテ、持齊ニテ有ケレドモ、主ノ呼ベバ急テ行ニケリ。五位其ノ半作ナル家ノ延ニ居テ、文共ナド披見テ事ノ沙汰共為ル程ニ、低シ臥テ文ヲ見ルニ、半作ノ家ナレバ、足代ト云フ物ニ、上ニ大キナル木共ヲ横様

ニ結付テ置タリケルガ、何ニカシケム、俄ニ繩ノ切レテ、低タル五位ノ上ヘニ落懸ル。大キナル木頭ノ上ニ落懸ヌレバ、頭モ破レ、頸モ骨モ可折キニ、烏帽子ニハ当タリケレバ破レテ打チ被□ニケリ、我ガ身ニハ聊ニ疵モ無ク、痛キ所モ無クテコソ有ケレ。烏帽子ニ当ル許ナラムニ、頭ニ不当ヌ様有ナムヤ。(略) (『今昔物語』 卷 19 第 39 話)



図 6 菅原道真の手紙や詩集を読む紀長谷雄 (『北野天神縁起』 卷 4 第 4 段より)

この五位の人は、上司に呼ばれ、いまだ工事が続いている新築の家に招き入れられた。そこで面白そうな手紙を見つけ、さっそく夢中に読みふけた。かれはただ手紙を読むのではなく、あたりをかまわずにリラックスした格好を取り、横になって取り掛かった。そこに工事中の巨木がなにかの拍子で落ちてくる。当たったら言葉通りの重傷のところ、奇跡的にも烏帽子に当たるだけで、本人はかすり傷一つ負わなかった。この説話はこの奇跡を観音の利益とし、ふだんの修行がこの結果をもたらしたのだと結ぶ。記述にはやや冗長な感じもするが、状況が生き生きとしていて、まるで絵のようなものだった。

このような説話に記された手紙をまつわるものを読むと、絵巻に描かれたものとは異なるイメージが生まれてくる。絵に見る手紙は、どれも改まった姿を見せる。手紙を書くなら片手におもむろに便箋を握り、送るなら持ち上げて街中を横断し、届けるなら縁側から恭しく差し出し、そして読むなら姿勢を正してとりかかる。絵に描かれたそれに比べて、説話に語られた滑稽なぐらいのエピソードは、まさに晴れ晴れした状況に影を落としてしまう。そのおかげで、手紙にまつわる風景は豊かになり、立体的に見えてくるものだった。



## 7 戦場の風景を読み直す

絵巻の一場面の意味、それにその背後に隠された文化的な情報を明らかにしようと、手紙にスポットライトを当て、絵から絵へ、そして文字文献へと、いくつもの追求を試みてきた。ここに来て、すこしずつ絵師が意識していた読者の生活の環境やその知識に近づけられたかもしれない。ならば再び後三年合戦の戦場へと視線を戻り、これまで得た知識を咀嚼しつつ、絵の内容を改めて読み直そう。

率直な目で読めば、この一段のストーリーは、そもそも不自然なものだ。戦争の最中に、孤城を永きに渡って囲み続けてきた軍勢の中において、結果的には勝利直前という時期にあって、武士たちが誘いあって武具を脱ぎ捨て、乗馬まで併せてお金を換えようと留守の家族に送り返すというのは、はたしてありうる状況だろうか。言ってみれば、このような行動自体は戦闘放棄であり、鎧兜や馬を手放したら、つぎにやってくる敵陣への突入や城を陥れるという熾烈な展開は、そもそも成り立たない。つまり個別な事例があるにしても、合戦の大局から考えれば、手紙作成ということは大きな動きになるようなことはあるはずがない。あったとしても、武士の棟梁としての源義家には名誉なことではなく、高々と伝えるようなことではなかった。

しかしながら、それでもこのような内容は絵巻の一段のテーマとなった。その理由はどこにあったのだろうか。敢えて答えをさぐるとすれば、それはまさに絵師あるいは絵巻作成を指示した人が抱く手紙作成というテーマそのものへの執着であり、なにがなんでもこれを描こうとした思いから来たものではなからうか。

その目で見れば、ここに描かれている手紙作成は、非常に詳細に渡り、作者の隠さぬ熱心が伝わる。構図的には執筆、封書、差出といったプロセスをものなく含み、それが一つの流れとなって、まるで手紙作成作法の図解だ。おまけにストーリーにはそれぞれの家族へとの設定にもかかわらず、1人目の武士はすでに1通の手紙を仕上げて前に置き、手にするのは2通目という不自然な

展開となる。いわばストーリーの状況や展開よりも、手紙をどう書くべきかというプロセスのオンパレードをこれでもかと思わせ付けようとする、作者の旺盛な表現姿勢あるいはサービス精神が見てとれる。

このような構図を成立させた直接なきっかけがあったとすれば、やや大胆な推測が許されるならば、ほかでもなく「みちのくに紙」の存在だったのではなかろうか。陸奥の国の戦争を描き、戦場の細部については想像をもって補い、身近な出来事をもって読者と交流を図るためには、陸奥の特産である紙、そしてその紙から手紙へと、極めて自然な展開が着想されただろう。そのために、王朝の重厚な伝統を背負う、ハイカルチャーの代表格の手紙と、戦場において生死に直面する武士の行動との、世にも楽しい出会い、あるいは不思議なミスマッチが生まれた。もともと当時の読者にとってみれば、これまた絵師一流の創意、工夫を凝らした演出に映ったに違いなかつただろう。

戦場の様子を描こうとしている絵巻の画面は、優雅な王朝的な美意識に支配され、それを表わそうとすることを基調とした。そのような美意識と表現する内容との落差が生まれた場合、ストーリーを伝えようとするはずの画面が、その時その場にいる人間のあるべき姿からの乖離さえありうる。その意味では、時代の文化や社会生活の背景を知り、表現者の理屈、享受者の視線、そして同じ時代の環境における両者の交流に注目を配ることは、絵巻を読み解く前提だと言えよう。

『後三年合戦絵詞』における手紙をテーマとするこの場面は、絵師の手による戦場風景についての一つの虚構の実例を見せてくれた。さらに言えば、絵巻の表現を理解し、絵の構図を楽しむための一つの典型的なありかたが示されたと記憶しておきたい。

〔注〕

- 1) 小松茂美他『後三年合戦絵詞』（日本絵巻大成15、中央公論社、1977年）。野中哲照『『奥州後三年記』注釈(1)-(7)』（『古典遺産』第47-51号、1994-2001年）。
- 2) 『消息耳底秘抄』（『群書類従』第9輯、底本は以下同じ）。百瀬今朝雄『弘安書札礼の研究』（東京大学出版会、2000年）。

- 3) 伊勢貞丈『貞丈雑記』巻9 (島田勇雄校注、平凡社、1985年)。
- 4) 小松茂美『手紙の歴史』(岩波書店、1976年)。
- 5) 保立道久「絵巻に描かれた文書」(藤原良章、五味文彦編『絵巻に中世を読む』吉川弘文館、1995年)。田中稔「絵巻に見える書状の書き方」(『中世史料論考』吉川弘文館、1993年)。
- 6) 伊勢貞丈『四季草』(江戸：岡田屋嘉七刊)。
- 7) 清少納言『枕草子』(日本古典文学全集、小学館、1974年、底本は以下同じ)。
- 8) 『今昔物語集』(新編日本古典文学全集、小学館、1999年、底本は以下同じ)。

#### \* 討議要旨

村尾誠一氏は、詞書の一場面を虚構化された世界として捉えているが、戦場の惨状を伝えようというもっと切実な意図を持っていた可能性はないのか、と尋ね、発表者は、「虚構」という言葉は絵を構成する重要な表現様式という意味で用いたのであって、否定的な捉え方をするものではないと答えた。

鈴木淳氏は、絵巻の模写はこれまであまり省みられることがなかったが、江戸末期に松平定信によって編纂された『古画類聚』などについても掘り下げて研究されることを期待したい、と感想を述べた。

郭南燕氏は、手紙を書く場面で文机のような台が描かれていないのはなぜか、と尋ね、発表者は、絵巻では経典がもっとも格の高いものとして表現されるため、それを強調する意味でも、経典よりも格の下がる手紙の場合には描かなかったのではないかと答えた。